

祝 辭

酒井 修

創刊ここに七年。「エビストラ」はいま次の大きな跳躍を試みようとしてゐる。本號が即ちそれである。その精神は既に「創刊の辭」(創刊號、二―三頁)に盡くされてゐるが、いま改めてこれを想起するにあたり、二、三の敷衍をする。

當講座の初代、朝永三十郎教授は、曾つて『哲學研究』創刊の折(一九一六年)、同誌を「手習ひ草紙」にたとへて、初心を床しくも言ひ表はされたが、それがやがて本邦哲學界において、「庭の隅石」であるにとどまらず、「家の親石」にまでなつたことは、その後の歴史が明證する所である。だが會員日頃の研鑽と精進の成果をあへて公にすべく斯く企投したことに、哲學といふ學問がおかれてゐる狀況は、「重荷を負うて峻坂を登る驛馬」に比するもなほおろかであらう。現在は最早大正ロマンティシズムの時代ではないし、まして、哲學が「普通の詞辭と爲り、商賈まで哲學々々」と喚き立てた明治憲法發布の頃(一八八九年)でもない。斯學に對する無關心ないし冷淡、更には輕視さへもが社會全體の現實であるかに見える。そのやうな情勢にも拘らず、哲學の傳統に基いた本格的専門的研究をこの體裁で公刊する以上は、當然、時代と社會とにあへて訴へんとして抑へ得ざる何かがあるが、つまり世に問ひ世に叫ぼうとする問ひと主張とが、ここに筆を執る者をそのやうに衝き動かしてゐるのでなければならぬ。だがそれと同時に、現實の側から哲學一般に問ひかけられてくる問題に對して謙虚に應答しようとする眞摯さも亦、先の主體的な問ひや主張と等根源的な動機として働いてゐなければならぬ。さうで

あつてこそ、ひとつひとつの論攷から聞えてくるものは、もはや例の聖域内隠語ではなく、「野に呼ばわる者の聲」となり得るであらう。そこからは「君は何故、西洋の近世の哲學を、（精神的文化的傳統を全く異にするこの國に生まれ育つて來たにも拘らず）そんなに我を忘れて熱心に研究してゐるのか」といふ問ひへの應答も、即ち研究者自身からの、彼のアイデンティティに對する自覺の言葉も亦、聞えて來ることであらう、といふのは、このやうな問ひが問題となる所にこそ、この哲學を他の諸學、特に科學から際立たせる特色のひとつがある、と考へられるからである。願はくは、ひとつひとつの論攷の聲が空しく地に墜ちることなく、聞く者の耳に届かんことを。今後、に幸多きことを切に祈る。

平成六年十二月